



より開かれた 美術館へ向けて

令和7年度も折り返し地点となりました。米価高騰やら酷暑続きなどで「平穏無事」とは程遠い半年でしたが、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

練馬区立美術館はアートマルシェ 2025の一環として、「身体で感じる緑とアート」展を9月に開催しました。5組の美術家が街空間や美術館で展示した多様な作品は、まだ記憶に新しいところかと思います。とりわけ、展示室一部屋をまるごと作品に変容させた廣瀬智央さんのインスタレーションは、従来の展示形式を超えるものでした。鑑賞者は、普段は入れない壁面展示ケース内に立入り、レモンが配された狭い通路を回避し、また他の作品では、寒冷紗とミントの香りに包まれた空間のなかで絨毯の上に寝転んだり、遊んだり、会話を交わしたりと思い思いに楽しめる場が創出され、さらにはミント・ティーも供されました。

今回の廣瀬作品は、その後の企画展の予定が当面入っていなかったからこそ実現し得た部分もあったのですが、コミュニケーションが生まれる、開かれた場としての美術館の可能性を示唆するものとなりました。美術館は、資料の収集、保存、展示という使命を果たしつつも、新たな視点からその制度や枠組みを常に検証し、活動の幅を広げていくこともまた必要です。例えば、欧米の一部美術館が近年推進している収蔵庫の可視化（オープン・ストレージ）は、その一つの試みととらえることもできます。展示室で公開できる所蔵品の数は限られるため、収蔵庫自体を来館者に開放する動きです。日本では紙や絹に描かれた収蔵品が多いため同様の取り組みは難しそうですが、当館では「バックヤードツアー」と称して、普段は見ることができない美術館の裏側を案内する館内ツアーを重ね、見える化をこれまで進めてきました。今後も様々なプログラムを通して、美術館を多角的に知っていただく機会を増やしていきたいと考えます。

また新しい美術館の構想では、完成形としての展覧会ばかりでなく、展示や撤収の様子も含め、日々進行する創作的活動そのものをライブ的に皆さまにご覧いただけるような展示室も設けていくことができればと思います。

より開かれた美術館の実現に向けてハード・ソフトの両面から準備・検討を重ねてまいりますので、引き続きご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

練馬区立美術館 館長 伊東正伸



「身体で感じる緑とアート」展 廣瀬智央 展示風景

ねり美・ふる文
コラボ企画

もっと 浮世絵で行こ！

幕末明治のくらし・娯楽・事件…

当館と石神井公園にある練馬区立石神井公園ふるさと文化館は同じ運営母体を持つ、いわば兄弟館のような関係ですが、美術館と博物館、といった性格上、これまでコラボ企画などが開催されたことはありませんでした。この度、両館の収集品を合わせた初の展覧会が実現します。



小林清親《アラビアンナイト 宮殿》
大正元～4 (1912～15)年 美術館蔵

当館は、2015年に「没後100年 小林清親展 ―文明開化の光と影を見つめて―」を開催。その時に紹介できなかった作品を中心に2021年「収蔵作品による小林清親【増補】サブプリメント」を開催しました。二つの展示をきっかけに明治期の浮世絵の寄贈品・寄託品が当館に集まってきました。一方、ふるさと文化館には上石神井村の名主で、代々この地域の名士であった栗原家に伝わった幕末の浮世絵130点余りが収蔵されています。両館の浮世絵を見ていくと、江戸時代の娯楽や文化、情報伝達を知ることができ、また江戸から明治への発展の様子を垣間見ることができます。



溪斎英泉《江戸町一丁目 和泉屋内泉寿 しかの かのこ》文政前期
(1820)年頃 ふるさと文化館蔵

その一部をご紹介します。

溪斎英泉《江戸町一丁目 和泉屋内泉寿 しかの かのこ》は大河ドラマで話題の版元葛屋重三郎(二代目)からの出版で、吉原の花魁を描いたもの。しかも、桜の花の下、泉寿花魁とお付きの二人の禿が描かれます…、が、もう一人の禿は??あまりに大きな前結び帯に隠れてかんだししか見えてません。ドラマに登場した歌麿より20年ほど後の

美人画です。

歌川国芳《人をばかにした人だ》はよく寄せ絵と呼ばれる、いわゆる戯画です。何人もの人体を使っておじさんの姿を構成する、他愛もないものですが、この構力とアイデアが国芳の真骨頂。同様の寄せ絵が他に2点。小猫の寄せ絵も登場します。



歌川国芳《人をばかにした人だ》
弘化4(1847)年頃 ふるさと文化館蔵

高輪ゲートウェイ開発の折りに海に線路を引くための堤が発掘されたニュースは記憶に新しいところ。その海の上を走る機関車を描いたのが小林清親《高輪牛町朧月景》です。まさに文明開化を描いた作品ですが、夕暮れに煌めく明かりがとても幻想的な一点です。



小林清親《高輪牛町朧月景》
明治12(1897)年 美術館蔵

両館の収蔵品合わせて90点余りで浮世絵の多彩さ、楽しみ方をご紹介します。

1月、大河ドラマは新番組になりますが、まだまだ浮世絵で行きましょう。

Exhibition

展覧会

ねり美・ふる文コラボ企画

もっと 浮世絵で行こ！

幕末明治のくらし・娯楽・事件…

会期：2026年1月25日(日)～3月8日(日)

会場：練馬区立石神井公園ふるさと文化館

主催：練馬区立美術館、練馬区立石神井公園ふるさと文化館
(公益財団法人練馬区文化振興協会)

event report

イベントレポート

「美術館バックヤードツアー」を6月20日と7月19日に実施しました。本催しは、普段は一般公開していない美術館の裏側を学芸員の案内でめぐるものです。作品搬入用のトラックヤードやエレベーターでは、大きくかつ重たい作品を輸送するための特別な機能について、そして、収蔵庫では作品を安全に保管するための環境や地震対策などをお話しました。展覧会とともに美術館の重要な使命である「収集・保管」について、現場をご覧いただきながら知っていただく機会となりました。



Events

令和7年度の後半は、以下のイベントを予定しています。
当館の「聞いて・見て・作る」ことのできるイベントを通じて、
美術の面白さを体験してみませんか？

《注意事項》

イベント内容や申込方法などの詳細については、各イベントの開催日およそ1ヶ月前の当館ホームページ (<https://www.neribun.or.jp/event/event.cgi>)、またはイベントごとの広報物（チラシまたは区報）をご覧ください。

※ 日程などは変更になる場合があります。

「美術と社会」
講演会シリーズⅡ 「近代美術」

当館では、昨年度より「美術と社会」と題した講演会シリーズを開催しています。講演会では様々なジャンルの第一線で活躍する専門家をお招きし、「美術を通して社会を見つめる」という切り口から現代の知を探究していきます。シリーズⅡにあたる今年度は「近代美術」をテーマに18世紀から20世紀初頭頃までの日本と西洋の美術、それを育んできた諸社会について、全5回にわたってご専門の視点からお話を伺います。

- 時期：1回目 9月20日(土) 14:00～15:30
題目：女性たちのフランス近代—芸術家と働く人々
講師：馬淵明子氏（前国立西洋美術館長）※終了しました
- ：2回目 10月25日(土) 14:00～15:30
題目：日本画の誕生
講師：佐藤道信氏（美術史家）
- ：3回目 11月29日(土) 14:00～15:30
題目：パリのアジア藝術家 1920—40を考える
講師：稲賀繁美氏（比較文学・比較文化研究者）
- ：4回目 2026年2月7日(土) 14:00～15:30
題目：近代日本と美術家
講師：尾崎正明氏（美術史家）
- ：5回目 2026年2月11日(水・祝) 14:00～15:30
題目：近代美術と社会—西洋近代絵画から見てくるもの—
講師：三浦篤氏（大原美術館館長）

対象：中学生以上

美術館バックヤードツアー

普段は見ることができない美術館の裏側を、当館の学芸員と巡るツアーです。奮っての応募をお待ちしております♪



時期：11月16日(日) 10:30～11:30
12月21日(日) 14:00～15:00
対象：小学生以上（小学校低学年の方は保護者同伴）

小学生ワークショップ

今期の後半ラインナップは、好きな素材で自由に作りたいものを制作できる「ネリビ図工室」、現代美術家を先生にお招きして制作物をつくる講座を予定しています。お子さんの手を動かす楽しさや造形表現への関心を養ってみませんか？

時期：「ネリビ図工室」12月26日(金) 11:00～16:00
「ユアサエボシの少年少女倶楽部 コラージュ大作戦」
2026年3月8日(日) 13:30～15:30



School program スクールプログラム

児童・生徒の皆さん向けに、学校の学習として美術館について知り美術に親しんでいただくためのプログラムです。学芸員が学年やご要望に合わせて内容をつくります。

今年度は、① 施設見学 と ② 出張プログラム を実施しています。

① 施設見学

美術館とは、どのような施設であるのかを説明するとともに、普段は見ることができない美術館の裏側を巡りながら機能や設備を紹介します。

② 出張プログラム

美術館担当者が学校へ出張し授業をお手伝いします。申請者のご相談のうえ、美術館の紹介や、所蔵作家・作品の紹介、所蔵品カードを使ったゲームなどを組み合わせた内容を提案します。通年で実施します。

※①②ともに繁忙期はスケジュールの調整により件数を制限する場合がございます。何卒ご了承ください。
スクールプログラムをご希望の際は、当館までお問い合わせください。



白髪一雄 《文覚 滝の行》

1972年、油彩・カンヴァス、162.0×130.0cm



兵庫県尼崎市の呉服屋の長男として生まれた白髪一雄(1924-2008)は、1948年に京都市絵画専門学校(現・京都市立芸術大学)の日本画科を卒業し、新制作協会の伊藤継郎のアトリエに通う傍ら、そこで出会った村上三郎、旧友の金山明らとゼロ会を結成する。1955年に吉原治良が率いる具体美術協会に入会してからは、泥の中を転がるパフォーマンス《泥にいどむ》(1955)や、ガラス容器にセメントや牛の臓物を漬けた《赤い液》(1956)(再制作版は公益財団法人尼崎市文化振興財団寄託)など幾つかの手法を試みたのち、代名詞といえる紙を床に置き天井から吊り下げたロープに捕まりながら足で描くフット・ペインティングの手法を考案する。そして1960年代からは、白髪の制作活動に仏教が大きな影響を与えるようになる。

ライフ愛好家でもあった白髪は、猪狩りのために山中を彷徨うなかで目にした、板碑に刻まれた梵字の造形に強く惹かれたことをきっかけに、独学で勉強をはじめ密教への関心を深めていく。それから9年後には天台宗の僧侶・山田恵諦と出会い修行を勧められ、1971年に比叡山延暦寺横川の元三大師堂で得度、1974年には阿闍梨になるための四度加行を終えた。僧侶となつてからの白髪は、作品タイトルに密教にまつわる出来事や真言を用いた。

本作のタイトル《文覚 滝の行》もまた、平安時代の僧侶・文覚が那智滝での修行中に不動明王とその使いである矜羯羅童子と制多迦童子に助けられる逸話に由来する。しばしば浮世絵の題材として気絶した文覚を童子たちが引き上げるシーンが描かれるが、白髪は人物よりも轟々と流れる滝の激しい水流を全面に描き出す。水流は黒色と白色のアルキド絵具を、板を改造した自作のスキージ(長いヘラ)で延ばすことで表現されるが、画面上部の右から左へ流れる2本のストロークと右上から左下へかけて延びる幅広の面、そして右下のハネが不動明王を表す梵字を連想させる。本作は、画道と仏道の双方の求道者であった白髪を象徴する作品であるといえよう。

学芸員 新井晃

再整備に関するお知らせ

練馬区立美術館は、美術館・貫井図書館の再整備に伴う解体工事のため、2025年12月28日(日)までで現施設の利用を終了することとしていましたが、解体工事の見送りにより、当面、開館を継続します。運営期間については、決まり次第、改めてお知らせします。

美術館・図書館の解体工事見送りについては、練馬区ホームページ「今年度予定していた再整備に係る解体工事は見送ることとしました」(https://www.city.nerima.tokyo.jp/kankomoyoshi/bunka/museum/museum_redevelopment/20250905.html)をご覧ください。

皆さまには、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

貸出施設の利用について

区民ギャラリー・創作室の利用方法については、美術館ホームページをご覧ください。

貸出施設	利用月	予約開始日
区民ギャラリー(一般展示室)	2026年1～4月	10月7日(抽選会)
創作室	2026年1月	11月1日

編集後記

暑すぎる夏も終わり、アートマルシェでは多くのお客様にご来場いただきました。12月から建て替えのために長期休館に入るといきや、解体工事見送りのため、来年度も開館と相成りました。それは、つまり来年度は展覧会をするということなのでしょう…。というわけで、美術館スタッフは右往左往しておりますが、2025年下半年も引き続き講演会やワークショップなどのイベントが盛りだくさん。ホームページやXなどで、ぜひ美術館の活動にご注目ください!

第57回 練馬区民美術展

1968年に一般区民の美術愛好者を対象に、大和銀行会議室で第1回アマチュア美術展が行われました。その後、2007年2月に練馬区独立60周年記念として開催された第38回から練馬区民美術展に名称を変更し、今回で57回目を迎えます。

区民の方々の日頃の創作活動の成果を発表する場として、練馬区在住・在勤・在学の10～20代の若者から70～90代の高齢者まで、幅広い年齢層の方々による多彩な作品の数々が並びます。出品された作品の中から、練馬区美術家協会委員と美術館長による審査を行い、区長賞・教育委員会賞・美術館長賞・奨励賞・努力賞をそれぞれ授与します。会期中には、審査にあたった練馬区美術家協会委員による講評会も実施しています。

第57回となる今回も、前回56回同様、2階の展示室を利用し、部門別に前期・後期の2回に分けて実施します。区民のみなさまの力作の数々をぜひご覧ください。

会場：練馬区立美術館2階常設展示室・一般展示室(区民ギャラリー)

前期 部門：洋画I(油彩画)・日本画・彫刻・工芸

会期：2025年12月11日(木)～12月16日(火)

※12月15日(月)は休館、最終日は午後2時まで

後期 部門：洋画II(油彩画以外の絵画)

会期：2025年12月21日(日)～12月26日(金)

※12月22日(月)は休館、最終日は午後2時まで

※出品作品の募集はすでに終了しています(募集期間：2025年9月1日～9月30日)

発行・問い合わせ：

 練馬区立美術館
NERIMA ART MUSEUM

〒176-0021 東京都練馬区貫井 1-36-16
TEL 03-3577-1821
HP：<https://www.neribun.or.jp/museum.html>
X(旧Twitter)：@nerima_museum

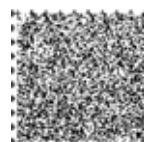
HP



X(旧Twitter)



Uni-Voice



専用アプリのUni-Voiceを使用して上の音声コードを読み取ると情報を読み上げます。